

## \*\*\* 今日の健康(8月) \*\*\*

### < 破傷風と予防接種 >

破傷風菌(*Clostridium tetani*)はグラム陽性の嫌気性桿菌で、孢子の形で土壤中に広く分布しており、外傷、火傷及び挫創部からヒトの体内に侵入します。侵入部で菌は増殖し毒素(神経毒)を産生し中枢神経を侵します。潜伏期間は挫傷、創傷後4~14日でこれが短いほど予後が悪いです。人から人への感染はありません。症状は段階的に進行し4期に分けられます。

1期は、顔面筋のけいれんによる痙攣に始まり、口が開きにくく首筋が張り、歯ぎしりを認めます。2期は、次第に開口障害が強くなり、上下顎の歯間距離は2~3cmから1cm以下に狭くなります。3期は、躯幹筋の強直性痙攣を起こし後弓反張を呈し、日光や騒音のような刺激で全身性強直をきたし、次第に激しさと頻度を増し生命に最も危険な時期です。呼吸困難、排尿、排便障害が強く、痙攣による骨折、肺塞栓、脱水症などもあります。4期では全身性痙攣は見られなくなりますが、筋肉の強直が残っています。諸症状が軽快していく時期です。

< 海外における状況 >

日本でも年間50例程度の報告がありますが、世界的に見ると年間100万人近くの死亡例があり、その70%は新生児で特に発展途上国に多く報告されています。WHOの勧めているEPI(拡大予防接種計画)の重要な課題の1つですが、1994年に世界中で80%の子供が1歳になる前にDPTを3ドース受けた成果が在る一方で、母親に免疫がないことから、毎年約50万人の子供が出生後3週間以内に死亡しています。高危険地帯では、母親(妊娠5ヶ月以後)に対する予防接種と安全な出生対策を同時に進めるプログラムを進めています。

< 小児の定期予防接種での DPT ワクチン対象年齢と標準的な接種年齢 >

DPT:ジフテリア(diphtheria)のD、破傷風(tetanus)のT、百日咳(pertussis)のP

DPT対象年齢                      日本の標準的な接種年齢[接種回数]

1期初回:生後3~90ヶ月未満の者……生後3~12ヶ月[3~8週間の間隔で3回]

1期追加:生後3~90ヶ月未満の者……2歳6ヶ月までに[1期初回完了後6ヶ月以上の間をおき、通常12~18ヶ月までの間に1回] 1期初回と追加の計4回の接種でDPT予防注射完了者となります(有効期間は約10年で12歳まで)。

2期追加:11~12歳(DT)……12歳(小学6年)[1回] (有効期間は約10年で成人まで)。

< 一般成人の予防接種(破傷風トキソイド) 成人以降は必要に応じて接種 >

#### (1) 基礎免疫がない場合の予防接種

(DPTを100%終了者でも20歳代後半からは必要に応じて接種)

初回接種:3~8週間隔で2回接種する。

追加接種:通常第1回目の追加接種は、初回接種の2回目終了後6ヶ月以上の間において1回接種(標準として初回接種の2回目終了後12~18ヶ月までの間)する。初回2回と追加1回の計3回の接種が終了すると破傷風予防注射完了者となります(有効期間は約10年)。

#### (2) 基礎免疫がある場合の予防接種 (必要に応じて追加接種していきます。)

破傷風予防注射完了者に対して追加免疫として数年(約10年)毎に1回接種。

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861

天文台通り多摩信用金庫のななめ裏

